

京都大教授 川上浩司さん(54) システム工学



素数ものさしを手に不便さの中にも価値があると語る川上教授(京都市左京区・京都大)

産の製造方式「ライン生産方式」に対し、1人または少人数で製品の組み立て工程を完成まで行う「セル生産方式」が現れ、大量生産という面では非効率だが、多くの品種を少量生産するの柔軟に対応できるといわれるようになっていた。「不便にも『益』がある」。研究室の片井修教授(当時)のその言葉に促され、「不便」というだけで見落とされ

探究人

回り道が生む広い視野

効率とらわれず有益追究

不便さがもたらす価値を「不便益」と名付け、ものづくりのデザインに生かそうと研究を続けている。2、3、5、7、11...と素数しか目盛りがない「素数ものさし」、次第に文字が薄れて3回同じ項目を開くと読めなくなる電子辞書、類似の仕組みのカーナビなどを開発してきた。「4」を測るには「7-3」と素数を組み合わせなければならず、3回で内容が消えるのなら必死で覚えるしかない。確かに不便だ。川上さんは「だからこそ、自ら取り組んでいるという手応えを感じられる」と話す。

不便さがもたらす価値を研究

「不便」がもたらす価値を研究する時代になり、興味を持ち始めた。「でも高校生の時たまに買った入門書があまりにわかりにくくて。大学でしっかり勉強しようと思った」と、1983年に京都大工学部へ進んだ。

当時の「第2次人工知能(AI)ブーム」と呼ばれる時代。政府は巨額の税金を投じ、AIにつながるコンピュータの技術開発を支援していた。川上さんも機械を思い通りに動かす制御工学の研究室へ進み、大

製造業で、少品種大量生産の製造方式「ライン生産方式」に、1人または少人数で製品の組み立て工程を完成まで行う「セル生産方式」が現れ、大量生産という面では非効率だが、多くの品種を少量生産するの柔軟に対応できるといわれるようになっていた。「不便にも『益』がある」。研究室の片井修教授(当時)のその言葉に促され、「不便」というだけで見落とされ

ている価値がないか、考えるようになった。例えば、セル生産方式では作業員のスキルアップや士気向上にもつながるとの指摘がある。スポーツにはルールや制限があるからこそ、熱狂できるのではないかと。子どものころ、下校時に白線の上しか歩いてはいけないゲームをして楽しんだり、まっすぐに帰らず寄り道したりした思い出。「大人になると効率ばかり考えるが、子どもは必ずしも『目的目指してまっすぐ

(山田修裕)

若者たちへ

「不便」「面倒くさい」という考えや思い込みで、物事を切り捨てることはやめよう。思考のバリエーションを減らすのはもったいない。何か新しいことを思いつかないといけない時、広い視野を持つことは力になるはずだ。